

分散城下町の成立とその統合原理

—下総国関宿城下町の復原を通じて—

川 名 禎

I. はじめに

- (1) 問題の所在
- (2) 史料としての絵図の性格

II. 関宿城下町の地理的環境

III. 関宿城下町の形成とプラン

- (1) 戦国期の関宿城下
- (2) 近世城下町の成立
- (3) 近世初期における城下町プラン
- (4) 近世における城下町プランの変遷

IV. 城下各町の性格と機能

- (1) 城下各町の概要
- (2) 町の機能及び形態的性格

V. 関宿城下町の地域構造

- (1) 譜代藩としての性格と領国経済
- (2) 分散形態の機能的統合

VI. おわりに

I. はじめに

(1) 問題の所在

近世城下町¹⁾の性格は、その成立過程における空間的な都市形成の在り方において具現化される。

松本は戦国期の城下町を、給人居住域と城下市町の2つの部分域が合一していない状態であるとし²⁾、矢守はそうした部分域の一体的結合により、両者がワンセットになって都市プランの中にレイアウトされることが、戦国期城下町から近世城下町への変容である

とした³⁾。

小島は給人居住域にも商業機能を認め、「イエ」支配の原理を持つそれと市場原理による市場の二元的構造を指摘し、両者の統合をもって近世城下町の成立とした⁴⁾。市村も戦国期の分散的で多面的な城下空間の一元化を、近世城下町創設の一要素として位置づけた⁵⁾。

他にも城下町の町通りにみられる「タテ」から「ヨコ」への変化に注目した足利の研究⁶⁾、長方形街区と短冊型地割りのセットの発生に注目した前川の研究⁷⁾、ヴィスタにみられる求心性の違いから公権力の形成期と確立後における都市形態の変化を示した宮本の研究⁸⁾などが近世城下町の成立を論じている。

中世都市の分散的性格は原田により早くから指摘がなされているが⁹⁾、そうした性格が近世において解消されていく傾向にあることは多くの論者が指摘しているところである。

ところが、近世に至っても分散形態を呈する城下町が存在する。松本はこれをその特殊性から変様式城下町と呼んだ¹⁰⁾。また矢守もそれを戦国期型の城下町プランとして自身の変容系列モデルの中に位置づけた¹¹⁾。

近世城下町の都市形態は、従来その共通性のみが強調されてきたといえるが、特殊とみられてきた中にこそ近世城下町の持つ本質が存在すると考えられる。

本稿で対象とする関宿城下町は、城下の各

キーワード：関宿城下町、プラン、分散形態、機能地域、政治的相互依存関係

町が分散形態を示す近世城下町である¹²⁾。従来指摘された変様式城下町がいずれも山城形式であるのに対して、関宿城下町は完全な平城を中心に、各町が水平的な分散形態を持つという特徴がある。

関宿城の築城は戦国期に遡り、梁田氏及び後北条氏の居城であったが、近世に至り徳川の譜代家臣松平康元が2万石で入部し、その後は譜代大名が頻繁に入れ替わり、宝永2年(1705)の久世氏入部以降は同氏が廃藩まで在城した。関宿は最大石高7万3千石を数える中小譜代藩の城下町であった。

『下総国舊事考』¹³⁾によると、関宿には江戸町、台町、元町、境町、谷貝町、内町の6ヶ町が存在し、さらに天明7年(1787)には、向下河岸、東高野、西高野、内河岸、向河岸、三軒家などが城下町の一部にあげられている¹⁴⁾。これらの町は、城に近接するものもあれば、城から最大で約6kmも離れた場所に位置するものもあり(図1)、城下町が持つ一般的なイメージとは多少異なるといえる。

本稿では関宿城下町を対象に、近世城下町としての成立と分散形態に至ったそのプロセスを明らかにし、近世城下町に内在する本質について検討する。

(2) 史料としての絵図の性格

近世関宿城下町の形成について考察するにあたり、まずは関宿城下を描いた絵図史料をもとにその復原を行う。関宿城及びその城下を描いた絵図は、現在のところ20点程度が知られている。しかし、それらの多くは、作成年代及び作成主体の明らかでないものが大半を占めている。

そこで本稿では、藩及び幕府により作成されたと思われる公用図に絞り、そのうち関宿城下までを描いた2点の絵図を対象に分析を行うことにした。

①内閣文庫所蔵「下総国世喜宿城絵図」

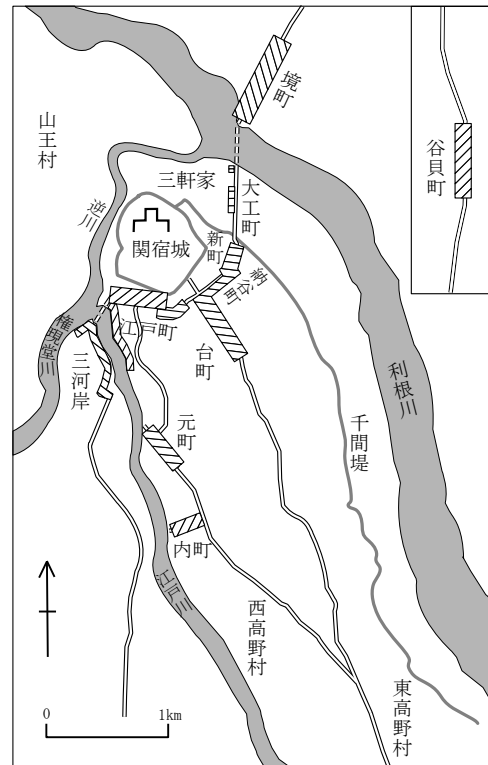


図1 関宿城下町の位置(近世後期頃)

注：谷貝町の位置については図6を参照されたい。

「下総国世喜宿城絵図」(以下正保図)は、国立公文書館内閣文庫に所蔵されている「正保城絵図」の1つで、正保国絵図の添献上物として作成されたものである。寸法は216×315cmで、狩野派の絵師による画風と色彩が施されている。記載範囲は、関宿城及び主要な城下周辺を描き、土地条件などの軍事情報が中心的な主題である(図2)。また文字注記がいずれも城郭へ向かう方向を頭に記されている点は、公用図としての規格性を窺うことができる。

作成年代については、図中にみられる「牧野佐渡守」の在任期間から、正保4年(1647)～明暦2年(1656)というかなり長い期間が想定される。しかし、正保の国絵図事業において下総国の絵図元の1人としてあげられているのは、牧野佐渡守親成の父親にあたる牧

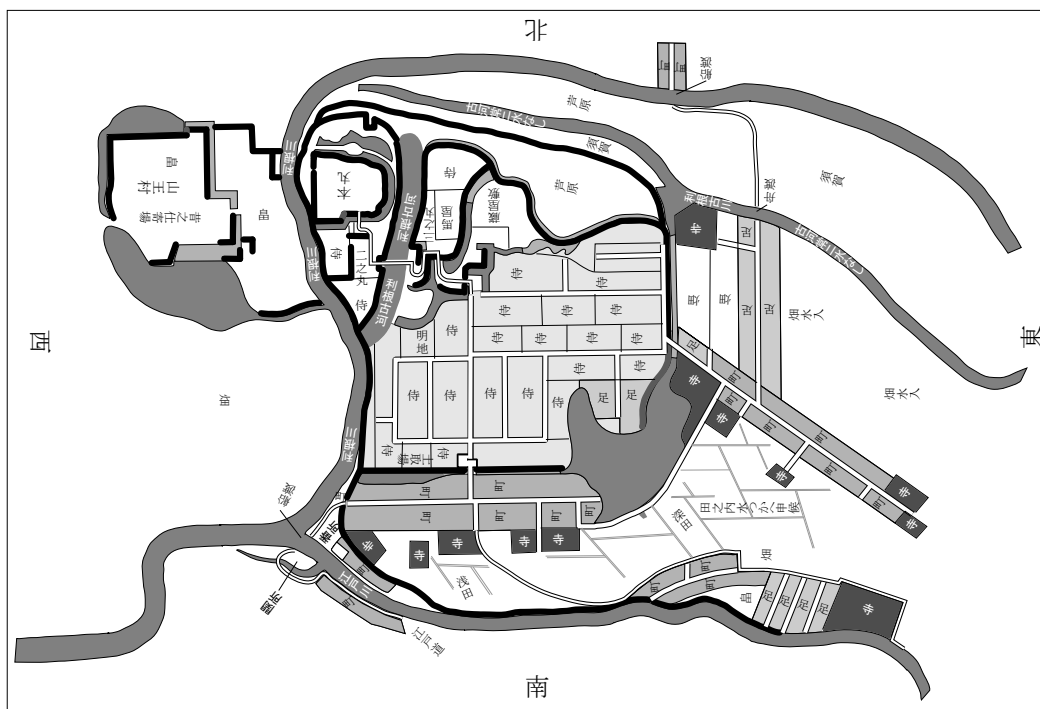


図2 下総国世喜宿城絵図（正保図）のトレース図（国立公文書館所蔵）

注：「侍」＝武家屋敷，「足」＝足軽屋敷，「町」＝町屋敷，「寺」＝寺屋敷を表す。距離注記等は省略。

野内匠守信成である¹⁵⁾。絵図調進の幕命が下ったのは正保元年で、翌年には関宿領内の村況を報告させていることから¹⁶⁾，正保図に描かれた状況も正保年間当時のものであったと考えられる。その後，幕府の要請による修正や清書を経て，最終的に提出された段階で藩主の交替があり「牧野佐渡守」の名前で提出されたものと考えられる。

②笠間稲荷神社所蔵「関宿城之図」

「関宿城之図」は，牧野家が関宿在城時代に作成したと思われる城下町絵図（以下牧野図）である。寸法166×127cmを数え，縮尺はおおよそ1/1200程度の実測図である。作成年代は，天和3年(1683)から宝永2年(1705)の第二期牧野氏在城期間に該当すると考えられる。

記載範囲は正保図よりもわずかに小さく，城を中心として江戸町，台町の範囲を描き，

元町や境町などは範囲外となっている。記載内容は，道の朱線や田圃の表現，文字注記の向きなど正保図に共通する。しかし，長さの表記は見られず，土地利用区分の表現も図的表現をとる。また正保図では記されない町名や寺院名などの記載がみられるが，家臣の屋敷割りや兵用のための絵図ではなく，城と城下の概況を表した藩用絵図であると考えられる。詳細は別稿に譲る¹⁷⁾。

その他，関宿城下のうち絵図に記載のみに見られない町については，文化3年(1806)作成の「関宿通多功道見取絵図」¹⁸⁾及び文書史料をもとに考察を行う。

Ⅱ. 関宿城下町の地理的環境

関宿は関東平野のほぼ中央部に位置し，河川水運の南北交通路である旧利根川水系と東西交通路である常陸川水系が接する流通上の

結節点に存在している¹⁹⁾。こうした立地環境は、北条氏康をして「関宿を手に入れることは一国を手に入れるに等しい」²⁰⁾と言わしめたほどであった。さらに関宿は河川を介した境界地点としての要地であり、周辺には農業的な生産基盤としての平野が広がっていた。このように合流する河川の流れと低湿な環境が、関宿城の立地条件を経済的かつ軍事的な点で高めていたといえる。

関宿城の立地環境に関する論点の1つに、旧利根川水系と常陸川水系の合流問題がある。旧利根川水系は近世初期の利根川東流事業によって常陸川水系に付け替えられ、両水系が合流し本流は東に大きく流れを変えたといわれている。しかし、すでに吉田東伍により両水系が細流により連絡されていたことが指摘されており²¹⁾、小笠原は両水系の繋がりが、近世初期の開削時点に遡ることを史料から明らかにした²²⁾。

関宿周辺は関東造盆地運動の中心部に近く、沈降が進む非常に低湿な環境にあるため、築城当時は河川の乱流が著しい氾濫原であったと思われる。そうした点を考慮すれば、旧利根川水系と常陸川水系が合流していたとの見解は妥当なものであり、権現堂川と常陸川を繋ぐ近世開削以前の逆川の存在も十分に考え得るといえる。

近世の利根川東流以前に、すでに旧利根川水系の一部が常陸川に合流していたことは、近世における伝承によっても窺い知れる。寛政3年正月「横田所左衛門家財録」²³⁾には、「往古利根川ト唱、文治年中武州幡羅郡ノ内疎通、又同国ノ内埼玉郡疎通、天文年中関宿御城脇字檜山下疎通、天正年前中利根川疎通与申伝候也」とあり、旧利根川が天文年間には関宿城の脇を流れ、天正年間以前に中利根川になったという伝承が存在する。また天正2年(1574)に関宿城を攻めた北条方の戦況を記す「北条綱成書状」²⁴⁾には、当時の関宿城を取り巻く河川環境が窺い知れる。「敵流

之外早速本城へ引籠候、流之儀更以渡無之深早候間、流之外曲輪三ヶ所自昨日普請堅固二被致之」とあり、これは関宿城に籠城する築田勢を前に、流水により攻めきれない後北条方が関宿城の対岸に三ヶ所の曲輪を堅固に造り、関宿方と対峙した様子が示されている。ここで後北条方により築かれた曲輪の1つ山王曲輪が、正保図の西端に描かれた曲輪(正保図には「山王村」とある)であると考えられる²⁵⁾。絵図からは曲輪が関宿城に向けて虎口を開き河川を挟んで関宿城と対峙するような構造で築かれていることがわかる。つまり、山王曲輪の存在からも戦国期段階においてすでに関宿城と山王村の間には河川が存在していたことが明らかになり、旧利根川水系と常陸川水系との接続が、関宿城と山王曲輪との間で起こっていたことが推測される。

両水系の存在は、戦時においては防衛上のバリアとして、平時においては水上交通の要所として重要な役割を果たしたと考えられる。さらに後には幕府によって江戸の出入りを取り締まる関所が置かれるなど、関宿は境界地点としての性格を持つといえる。

ところで、こうしたいくつかの河川が流入することによって生み出される低湿な環境は、水害の危険をはらむ。関宿城の周辺では沖積層が河谷を埋積し、洪積台地と沖積低地との違いを地表面から判断することは難しい。標高差の乏しい台地開析河谷は溢流時には河道を形成したと考えられ、旧利根川水系の一部は常陸川水系と同じ東南方向において旧河道の痕跡が確認できる。こうした地形環境において、居住区の形成は台地上のわずかな微高地を中心に営まれていたと考えられ、そうした点は近世城下の立地の在り方にも影響を与えているといえる。近世には利根川水系の付け替えや土砂の堆積作用によりさらに多くの水害が関宿を襲ったが、その度に堤防建設や排水工事、施設の移転(寺院や渡し場)といった対策が講じられてきた。また、幕府として

も関宿藩に対して恩貸や領地の変更などを行うことで藩の運営を援助しており、関宿が地理的に重要視されていたことを窺わせる。

Ⅲ. 関宿城下町の形成とプラン

(1) 戦国期の関宿城下

近世の関宿城は戦国期の城をそのまま引き継いだもので、近世初期段階での新たな立地移動はみられなかった。そうした点からも戦国期における関宿城下の実態を明らかにすることは、それが後の都市形成を規定したという意味で重要である。戦国期から近世初頭にかけての関宿城下に関する研究は、市村、長塚、阿部、新井、遠山、伊藤など多数に及ぶが²⁶⁾、ここでは主要な論点の1つにあげられる関宿城下の2つの町場について、その現地比定を検討する。

戦国期の関宿城下は、台宿と網代宿という2つの宿によって構成されていたといわれるが、さらに史料上では「宿」「内宿」「外宿」「新宿」などの地名も散見され²⁷⁾、これらと台宿、網代宿との対応関係も含めて宿の所在地について多くの論者によって異なる意見が出されてきた。台宿に関してはいずれの論者もその所在地を台町に比定しているが、「内宿」と「外宿」の関係においては両者を台宿とする立場と後者のみを台宿とする立場とに分かれる。一方の網代宿では、市村、長塚、阿部が元町・内町周辺に比定しているのに対し、新井、遠山は江戸町の一部から西関宿にかけての地域に比定している。また、伊藤は元町・内町から西関宿にかけての地域とし、両者を合わせたより広域な範囲を想定している。さらに「新宿」に関しては、市村が台町の東に、長塚が台宿に、阿部及び遠山が網代宿に、新井が元町・内町に、伊藤が木間ヶ瀬あらじゆく新宿にそれぞれ比定し、いまだ見解の一致をみしていない。

戦国期における関宿城下の特徴は、「内宿」と「外宿」の地名からも明らかのように、内

と外を分ける構造物、つまり囲郭の存在を窺わせる点にある。この囲郭は水系や土塁によるものであったと考えられ、近世の関宿城を描いた正保図からも確認できる。遠山は、「内宿」「外宿」は地名ではなく、関宿城の攻め手による認識だとする見解を示したが、囲郭を挟んで内側と外側にそれぞれ宿が存在したことが、客観的に認識されている点は重要である。これらを単純に当てはめれば、「内宿」=台宿、「外宿」=網代宿ということになるが、先行研究では「外宿」を台宿の一部とする見方が優勢である。それは、現在の台町が囲郭の外にあたることから、台宿の位置も同様の場所であるとする固定観念によるものといえる。しかし、後述するようにそうした場所に台町が成立するのは、若干時代が下るものと考えられる。確かに囲郭の外にも「内宿」から連なる町場が延伸していたことは否定できないが、それを積極的に示す証拠が今のところ確認できていない。いずれにせよ「内宿」「外宿」のどちらか一方あるいは両方が、台宿及び網代宿であることは間違いないといえる。

網代宿については、「元町より吉田村上宇和田に亘り網代町と云う市街あり」²⁸⁾という口碑が残っており、広域地名であったことが知られる。現在元町に字阿代の地名が残っているが、その元町は正保図では町の西側を江戸川に分断されて描かれている。つまり江戸川開削以前の元町は、さらに西方に延びていたものとみられ、元町の前身と思われる網代宿も同様であったものと考えられる。

以上のように戦国期の関宿城下は、城の囲郭を挟んで内と外に展開していたものと考えられる。台宿は城に隣接し、網代宿は城から隔たって存在しており、両宿は異なる立地形態を保持していた。また台は台地を、網代は漁獵施設に由来する低地を示す地名とみられ、こうした異なる立地環境が両宿の持つ機能の違いを表していると考えられる。つぎで

は、戦国期の関宿城下の在り方が、どのように変化して近世城下町を成立させたのかについてみていく。

(2) 近世城下町の成立

天正18年(1590)後北条氏の滅亡後、関東に領地替えとなった徳川家康は、譜代家臣を関東領国の要所に配置した。関宿には同年、家康の異父弟にあたる松平康元が2万石で入封し、翌年下総国内に2万石を加増され4万石を領した。徳川氏の関東領国における城下町建設は慶長5年(1600)の関ヶ原合戦以降に本格化されるが、関宿では慶長8年(1603)康元の子、忠良によって網代穀町に対し、7年間の諸役不入、穀売の専売特権、借錢の帳消からなる町人誘致政策がとられた²⁹⁾。さらに慶長14年(1609)にも同様の掟を出し、「欠落之者」への穀町帰住を促している³⁰⁾。

網代穀町の町名はそれ以前にはみられず、恐らく松平氏によって町立てされた新町であったと思われるが、その新町こそ後の江戸町にあたると思われる。そうした江戸町の起立を窺い知る近世の伝承が存在する。「懷中諸用之覚書」には、「江戸町始り、慶長八卯年元町より出ル」とあり、先の網代穀町に集住政策が取られた年を江戸町起立の年として伝えている。つまり網代穀町は、網代宿から分かれた新町であり、後に江戸町と名称を変えたものと考えられ、江戸町成立以後、もとの網代宿は江戸町に対し元町と呼ばれるようになったと思われる。

新町として起こった江戸町は関宿城の大手門前に建設され、網代宿の主要な商人が移住していることから、網代宿の主要な都市機能は江戸町に移動したものとみられる。このように網代宿の都市機能を城に引き寄せることにより、いわば「ソト」から「ウチ」へと移動するかたちで近世城下町の整備が始まったといえる。

江戸町が戦国期の網代宿から新たに新町と

して派生したのと同様に、台町も中世以来の台宿をそのまま踏襲したと考えるには、不自然な点がみられる。それは伊藤も指摘するように、天正18年以前から台宿に存在していた寺院が、台町の町外れや町裏といった場所に立地する点である。恐らく台町の成立にもなんらかの画期が存在した可能性が考えられる。

台町の場合も町の成立に関する伝承が存在する。安政5年(1858)「御巡見様御尋之答」³¹⁾には、「当町初り天正拾八年元町より出ル」とあり、台町が天正18年に元町より分かれて起こったことが記されている。また「横田所左衛門家財録」にも、「天正十七年丑正月横田所左衛門佐細代(網代力)ヨリ台宿移り……夫ヨリ後台町改申伝」³²⁾とあり、どちらの伝承も台町が網代宿(元町)より発生したことを伝えている。

両者では伝えられる年次が異なっている。前者は松平氏入封時の町立てを想像させ、後者は後北条氏によるものであったことを示しており、この1年の違いが注目される。どちらの年が正しいのか、その決め手となる史料が存在する。それは北条氏政が網代宿の町人である寺島、大谷の両氏に「台宿之町人と相定上、網代居住悪候、自身者来月廿日を切而台宿へ可罷移候」³³⁾と、台宿への移住を命じたもので、天正17年(1589)4月27日に発給されている。つまり天正17年に網代宿から台宿が新たに誕生したことを裏付けるものである。それ以前の台宿は、「内宿」という名称からもわかるように主に総構の内側に存在していたものと推測できる。それに対し、天正17年以降の台宿は、構えの外側に街村をなした形で新たに再編成された可能性が考えられる。台町に関しては、いわば「ウチ」から「ソト」への移動があったものと理解でき³⁴⁾、江戸町及び台町の形成は、戦国末から近世初期にかけて成立した城と町との新たな関係を表しているものといえる。

このように近世の関宿城下町は、戦国期以

来の町場を再編成した江戸町、台町、元町の3町を中心に形成されたものであったといえるが、この他にも利根川の対岸には境町及び谷貝町が存在した。

境町は、元和2年(1616)に幕府の定船場として指定されていることから、渡津集落として発生したものと考えられる。近世の初期には、「慶長之頃者御用船等茂相勤候由申伝候」³⁵⁾とあり、川舟の御用を勤めていたことが伝えられている。

また、寛永期になると河岸問屋や多くの船持の存在が確認でき、利根川の東流と江戸川の開削を契機に境町は次第に奥州荷物輸送の結節点としての地位を確立していったものと思われる。さらに日光東往還の整備により宿場町としての性格を持つようになった。

一方、谷貝町の成立は、「(慶安元年から)三拾年以前未ノ年谷貝新町被仰付候節」³⁶⁾とあることから、元和5年(1619)に成立したことがわかる。さらにこの年は、將軍秀忠が日光社参を行った年であり、谷貝町では「御公儀之御用」等を行うための定夫を町に置いている³⁷⁾。こうして谷貝町も日光東往還の宿場町として成立した。

境町及び谷貝町の両町は関宿城から隔たって存在するものの、河川や街道の交通運輸機能を担う町として成立し、そうした都市機能を吸収する形で各町が分散した状態のまま行政的に関宿城下町へと編入されていったものと思われる。

これらの町がいつの段階で関宿城下町を構成するに至ったのかは分かっていないが、寛文3年(1663)の日光社参に関する史料には江戸町、台町、元町、境町、谷貝町の5町の名が見出される³⁸⁾。その後これらの町は「御城下五町」³⁹⁾と呼ばれ関宿の中心的な町人町を構成した。

(3) 近世初期における城下町プラン

つぎに近世初期における関宿城下の全体的

なプランを正保図をもとに検討したい(図2参照)。関宿城の城内は、逆川や利根川あるいはそれらの旧河道及び沼地によって巧みに城の塁線が形造られ、三の丸の外側には広い武家地がタテとヨコ方向に屋敷割りされ、それらを土手と水路及び沼が囲繞し惣構えを形成している。大手門の枳形から内側を城郭内とみれば、関宿城下町は郭内が全て武家地で占められる郭内専士型(町屋郭外型)のプラン⁴⁰⁾に該当するといえる。士分以下の居住地である足軽町は、郭内と元町の南側や台町の北側などの郭外にも置かれていて、城下町の防御を意図した配置がなされている。

一方、町人町については、江戸町及び内河岸と向河岸、台町、元町、境町が描かれ、城から遠く離れた谷貝町は描かれていない。図3は、明治16年(1883)の迅速測図を原図として用い、正保図に描かれた城下町を復原したものである。これによると城郭内から南東方向に延びる街路が、旧大手門を通り台町の街村を形成していることが看取される。つまり台町はタテ町型のプランであることがわかる。これに対し江戸町は、大手門に対し垂直に接するヨコ町型のプランを採用し、先行する台町のプランとは異なる形態を持っている。これは慶長期以降に各地で行われた街道整備を反映して、城下町の建設が街道の導入を重視したことに起因すると思われる。両町のプランの相違は、城下町プランのタテからヨコへの変化、天正18年を境とする両町の成立時期の違いを物語るものである。さらにこうした2つの異なる原理が同居する形で、関宿城下町が形成されていることに、その特徴をみることができる。

江戸町と台町が城郭に隣接しているのに対し、その他の町は城から隔たって存在する。元町は戦国期以来の町場であった網代宿が、その場に残存した状態で城下町に編入されたものであり、本来は北西方向に延びる街路沿いに形成された町であったとみられる(図1)。

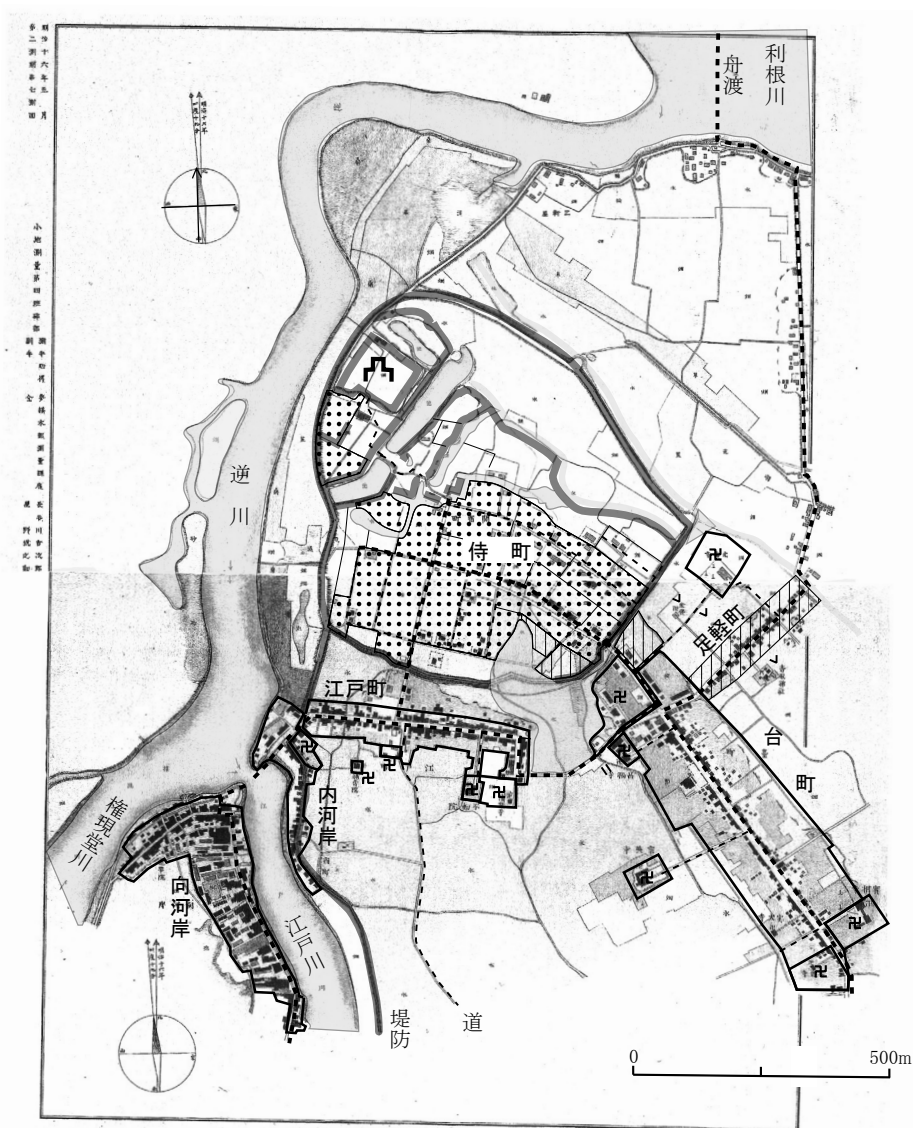


図3 関宿城下町復原図（正保期）

注：迅速測図原図「千葉縣下総國東葛飾郡関宿其一、其二」（明治16年実測）を使用。

正保図に描かれた元町は町の一部を削り取られたように表現されている。それは寛永11年（1634）に元町のある台地が江戸川の開削を受けて街路及び町が分断され、城の大手門から延びる街道は元町の脇から進入し江戸に向かうという特異な形態を取るに至ったためと考えられる。元町は絵図にも畑地の利用がみ

られるように、関宿城下町の中でも高燥な土地であった。元町の南側には足軽町の小路が3本描かれ、その東には大きな境内を持つ「寺屋敷」が存在する。この寺屋敷は元和3年（1617）に網代から移転して来たと伝えられる総寧寺と考えられる⁴⁰。これら足軽町と寺院は、微地形に規定されながらも、城下町

の南限を区切るような位置に配置されている。

江戸川の対岸には、内河岸と向河岸（いずれも江戸町の一部）、向下河岸の関宿三河岸がみられる。近世における江戸川の開削は、太日川のルート⁴²⁾を利用するかたちで、元和8年(1622)に三河岸付近より開始された。そして開削の翌年には関宿関所が始まったと伝えられる⁴³⁾。これ以前における関所の存在や場所については不明であるが、江戸川開削による関所の設置に伴い、次第に三河岸が形成されたものと思われる。正保図には関所前の舟渡を渡り向河岸を経由して江戸に向かう街道が描かれている。

正保図をみると、利根川の対岸には、境町が描かれている。城内から境町に向かうには、台町北方の足軽町を通り、利根川の新田2つの河道を船で渡らなければならないが、「古河常二水なし」と注記があるように、次第に旧河道は陸化していったものと思われる。さらに付近には「芦原」や「須賀」と記されるような自然堤防や河畔砂丘などの微高地が点在していたものと想像される。渡津集落として成立したと考えられる境町が、こうした河道の変遷とどのように関わったのか不明であるが、正保期には、利根川の新河道に隣接した町場として城下町の一部を担っていた様子が正保図からも窺われる。

以上、正保図をもとに近世初期における関宿の城下町プランを概観してきた。関宿城下町は、武家地と町人地の居住区が分離した郭内専土型のプランを採る。このプランは近世城下町プランの完成型とされるが、関宿城下町の全体を見渡した時、戦国以来の町場が一部に編入されずに残り、町場の分布も分散的であり、統一した都市計画はみられない。逆に中世的な要素を色濃く残す性格を持っているといえる。また寺院配置についても特に1ヶ所に集め管理されているわけではなく、町の背後や境界に分散的に配置されている。

ただこれらの寺院は寺町を形成せずとも城下町を取り囲むように要所へ配置されていることから、都市計画上の一定の役割を果たしていると思われ得る。しかしながら、それらの配置は必ずしも計画的かつ同時に行われたわけではなく、結果としてそのような形態に至ったと理解するべきであろう。いずれにせよ関宿城下町のプランは一般的にイメージされる城下町の在り方とは異なることが理解できる。

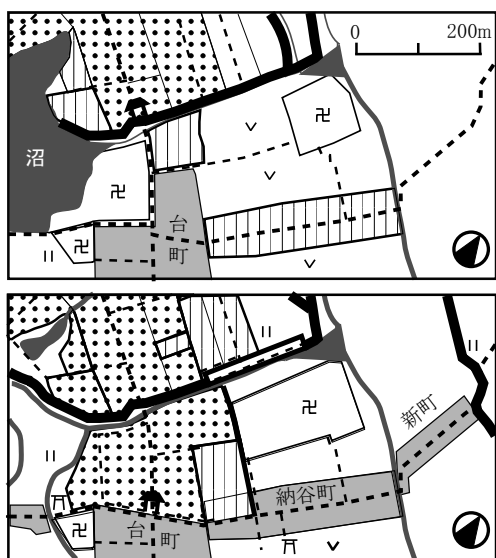
(4) 近世における城下町プランの変遷

関宿城下町は近世を通じて大きく改変されたという事実は認められない。しかし、近世初期の城下町と比べて近世前期以降に明らかに変化している点をあげるとすれば、搦手門（台町門）周辺の台町におけるいくつかの変化と元町の南方に新たに内町が成立していることがある。

まず台町の変化を牧野図をもとに検討してみたい。図4は、搦手門周辺の変化を正保図と牧野図から復原し、比較したものである。牧野図では正保図にあった搦手門が惣構えの土手の位置から台町方向へ移動し、これに伴いかつての門前の西側にあった寺院（実相寺及び実台寺）が移転し、その跡地が武家地に転用されている。土手の南側にあった畑地もまた武家地や足軽屋敷に変わっており、実質的に城郭が台町方向へ拡大していることが窺われる。

また台町の街道沿いに存在した足軽屋敷地は、その多くが町人地へと変化し、町内に納屋町や新町が新たに成立している。納谷町・新町の一帯は納谷原と呼ばれた利根川旧河道の氾濫原で、溢水の影響を被る危険な地帯であったが、町の北方に新たに堤防を築くことで、こうした場所への進出を果たしたといえる。

この千間堤は、寛文12～13年(1672～73)に完成したとされ⁴⁴⁾、城内から東高野村にか



凡例

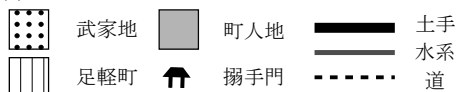


図4 惣手門周辺における土地利用の変遷

上・正保図（17世紀中頃）

下・牧野図（17世紀末頃）

けて約4kmにわたる大規模な堤防である（図1）。城下西側に築堤された他の堤防と併せて、城下全域を水害から守る輪中のような役割を果たしていたとみられる。東西高野村と関宿城下の関係についてはほとんど明らかにされていないが、両村は城下町の一部として認識されている。そこには両村における商業的機能の存在が想定されるが⁴⁵⁾、この千間堤が東高野村にまで及んでいる事実は、それが完成した近世前期においてすでに城下と密接な関係にあったことを物語るといえる。

もう1つの城下町における大きな変化は内町の成立である。内町の位置は元町の南方、正保図の東南端において総寧寺と思われる寺院が描かれている付近にあたる。正保図には総寧寺を除く元町の他の寺院は描かれてはおらず、情報の取捨選択が行われたと理解できるが、その反面、総寧寺の重要性が浮き彫り

になる。同寺は、足軽町を並置し、城下の南限を区切る境界性を帯びており、軍事的にも重要な役割を担ったと考えられる。また、比較的広い境内地を有することから、境内には門前町屋の存在も想定される。総寧寺は寛文3年に下総国府台（現市川市）へと移転するが、その際に旧境内地に残った門前町屋が、後の内町になったと考えることができる。内町の「内」は境内に由来する言葉ではないかと思われるのである。つまり内町は寺院門前起源であったといえる。一方、総寧寺に隣接した足軽町はその後廃止され、文化年間に作成された「関宿通多功道見取絵図」にもその存在が描かれていない。また、明治期の地籍図をみても地割などの痕跡が不明瞭であり、近世の早い段階に城郭付近へ移転したものと思われる。

ところで、こうした城下町の変化は一体何を契機に起こったのであろうか。その1つの要因として考えられるのが、度重なる大名の転封と幕府代官の支配期間である。とりわけ寛文9年（1669）12月、それまで関宿藩主であった板倉重常が伊勢亀山に転封になると、関宿城下は同年4月から7月まで幕領となっている。こうした期間を経て足軽町の廃止及び移転、町屋敷の拡大などが段階的に行われたのではないかと考えられる。牧野図以降における城下の変化として特に注目されるのは、千間堤の堤外地に大工町が成立していることである。大工町は街道に沿った台町の町内町であるが、その名称から職人町として成立したものと推測される。

以上のように、近世における関宿城下町の変化には、主に2つの特徴がみられる。1つには足軽屋敷地の城郭への移動とそれに伴う城郭の実質的な拡大である。総寧寺や台町に隣接して存在した足軽町が、城郭の内部や周辺に引き寄せられることで士卒と町人、百姓の居住地は二極化し、郭内専士型への傾向が一層強まったといえる。一方で城下全体の防

御性は解消され、町人地は拡大していった。もう1つは台町のヨコ町型化である。台町は本来タテ町型のプランであったが、納屋町、新町、大工町といった町内町が街道沿い新たに成立することにより、全体としてヨコ町型を呈するに至った。またこれらの町に加え内町や東西高野村の存在から、近世前期以降に城下がより開放性を持ち分散傾向を示していったことが窺われる。

IV. 城下各町の性格と機能

(1) 城下各町の概要

関宿城下の各町は、それぞれに成立時期や機能、立地の在り方などが異なっており、非常に多様な様相を呈する。以下ではそうした関宿城下の各町が持つ機能と町の形態についてその概要を述べたい(表1)。

①江戸町

江戸町は、本町、新町、渡場、内河岸、向河岸から構成される。本町は城の大手門前に位置し、戦国期以来の城下商人である名主会田家をはじめ、古くからの有力商人が居住していたものと思われ、城下町の中心的な役割を果たした。また宿場町としても機能し、名主宅や寺院が本陣、脇本陣を務めた。町は街

路に面して屋敷地が割られ、背後には古くからの寺院が置かれている。幕末期の江戸町の町高をみると338石余りで多くの農地を所有しており、農村的色彩も濃い。一方で内河岸と向河岸は田畑を持たない非農業的な集落であった。江戸町には名主が、内河岸及び向河岸には庄屋が置かれ、同じ江戸町にあって機能の異なる2つの地区が併存していた。

また両河岸は、隣接する向下河岸と併せて関宿三河岸と呼ばれた⁴⁶⁾。特に向河岸は、「富家多くありて、関宿第一繁花の地なり」⁴⁷⁾といわれ、河港機能を担う一方で、喜多村家に代表される干鰯問屋の豪商が居住し殷賑を極めた。

関宿三河岸は網代宿の河港及び渡船場の機能を継承しつつも、それまでとは全く異なる河岸環境によりその後の隆盛をもたらしたといえる。すなわち江戸川の開削、関宿関所の設置、農村における干鰯需要の拡大である。関宿関所は元和2年に指定された「定船場」が発展したもので、その後、川関所となり幕府から関宿藩に管理運営を委ねられた。関宿河岸の問屋は、積荷及び旅人の改めといった関所業務を請け負うことにより成立したもので、舟運業に関しては後背地の荷物輸送と舳

表1 関宿城下町比較表(石高、家数、人数)

年代 町村名	元禄15年	幕末期	天明8年			
	石 高	石 高	家数	役屋敷数	人数	男性率
江戸町	261石余	338石余	—	42軒余	—	—
向下河岸	42石余	42石余	70軒	26軒	286人	53%
台町	524石余	736石余	269軒	62軒半	984人	55%
元町	315石余	357石余	66軒	51軒	253人	54%
内町	66石余	66石余	20軒	12軒	88人	51%
境町	319石余	437石余	367軒	34軒	1573人	54%
谷貝町	193石余	404石余	62軒	32軒	287人	58%
東高野村	32石余	95石余	—	—	—	—
西高野村	156石余	160石余	—	—	—	—
出典	元禄下総 国絵図	「旧高 旧領帳」	「懐中諸用之覚書」 (関宿会田家文書)			

稼ぎを主体とした⁴⁸⁾。

②向下河岸

関宿三河岸のうち、向下河岸だけは独立した村として存在する。江戸町に属する2つの河岸とは成立時期が遅れたものと思われる。村高42石余りで農地も存在するが、三河岸として実質的な都市域を構成している。明和8年(1771)には三河岸と渡場を併せ953人に上る人達が、「川内渡世」に従事している⁴⁹⁾。

③台町

台町は関宿城の搦手門に面した江戸町と並ぶ主要な町人地である。一方で村高は736石余りで、広い町域に多くの農地を抱える農村的側面も持っていた。「寛文朱印留」⁵⁰⁾には「台町村」と記され、町内組織も名主を中心とした村方三役が置かれるなど、支配の上でも都市と農村の機能が交錯する町であった。町域は、東(上中下の三町)、西(同)、納谷、入納谷、新町、大工町、仲町、埜中、下納谷、その他からなり、個別町と村(組)からなる惣町とされている⁵¹⁾。

形態的な特徴は、城に対しタテ方向とヨコ方向のT字型の街路に沿って町屋が展開している点にある(図1及び図3参照)。近世初期に成立したタテ方向の町屋は、両端に寺院が配され町屋域が固定されており、城下町成立当初からの町人が居住したものと思われる。

明治期の地籍図⁵²⁾によると、町割は街路に沿った短冊形で、地尻線(屋敷割の奥行)が長いのが特徴である。建物の背後には屋敷林や畑地が展開していたと思われ、近世における新田地割の形態に似ていて台町の農村的性格を窺うことができる。これに対しヨコ方向に展開した町屋は成立が新しく、地尻線も短いため、より都市的な性格が強かったものと思われる。

④元町・内町

元町は網代宿の流れを汲む古い町人地であり、大手門から南方へ約1km離れた微高地

に位置している。現在は町屋部分の半分以上が江戸川の河川敷となって消滅しているが、図5をみると、2つの寺院を中心として街路に沿った町割と短冊形の屋敷割が確認できる⁵³⁾。町の南方には城下町や市場町に共通してみられるクランク状の屈曲があり、防衛及び経済的な考慮がなされたものと見なされるが、こうした形態から元町においても近世的なプランが採用されたものと思われる。

元町の幕末期における石高は357石余りでやはり農村的性格が強いといえるが、一方で町の西方には渡し場や行人河岸が存在し、関宿河岸の河港機能の一部を担っている。また元町は江戸町の故地と考えられ、現在でも同町の飛地が多く存在し、両町の関わりの深さを窺い知ることができる。さらに元町南東に位置する東高野村、西高野村の一部が元町に含まれていたことは前述した通りである。

元町の南方約100mに位置した内町は、江戸期を通じて石高66石余りの町である。地籍図⁵⁴⁾によると、町の形態は短冊形の町割を持つコンパクトに凝集された街村で、主要街道には直接面していないがその影響下にあるとみられる。町としては小規模である。

⑤境町

境町は関宿城の北方、利根川の対岸に位置する渡し場・河港機能と宿駅機能の卓越した集落である。石高に比して人口が多く(表1)、役屋敷数の少なさから考えても江戸期を通じて著しく発展した町であるといえる。こうした町の発展は境町が城下町であることと直接

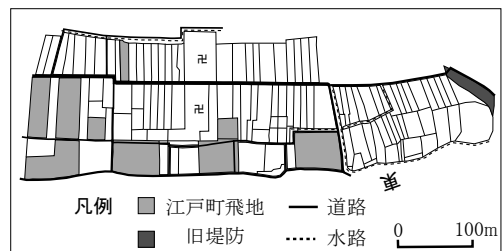


図5 元町字阿代字限図(明治9年)トレース図

関係してはいない。天明5年(1785)の書上げによると、全人口の58%が交通関係に従事しており、商業人口は24%、農業人口は12%に過ぎないという⁵⁶⁾。つまり利根川に面した河岸場と日光東往還の宿場という条件が境町の主要な機能であるといえる。とりわけ日光東往還を経由して利根川・江戸川へ人や荷物を送る、陸上輸送と水上輸送の結節点にあたる境町は、江戸に向かう奥州筋の人や荷物が集中する東日本の一大集積地であった。さらに肥料を中心とした問屋が、下総、武蔵、常陸、下野と領国を越えて取引を行う一方、各地の商人が境町へ買付に訪れることで、町の商業機能も充実していったとみられる⁵⁶⁾。

このように交通機能に特化した境町であるが、城下町としては町役を、農村としては年貢を負担した。形態的には街道を中心とした街路村を形成するが、短冊形の屋敷割の地尻線は鮮明には統一されていない⁵⁷⁾。町全体としては吉祥院や香取神社の門前を含む複軸構造である。

境町の町屋は街道に沿った舟戸、中宿、上中宿、上宿の町内町に分かれて存在するが、これらは関宿城でなく日光方面を上としている。

⑥谷貝町

谷貝町は、関宿城の北方約6kmに位置する日光東往還の宿場町である。町は長井戸沼と鶴戸沼に挟まれた台地の狭隘部に位置し、付近は古くからの交通路であったと思われる。町の南北方向には直線古道の痕跡が確認でき、北は結城方面に、南は守谷方面に延長することができる⁵⁸⁾。

また戦国期には逆井城と並ぶ後北条領国の前線付近にあたり、拠点としての性格をも有していたのではないかと想像される。谷貝町の名主である初見家は中世以来の土豪であり、こうした支配層を核として近世の宿場が形成されたものと考えられる。

谷貝町の西方には「元屋敷」の地名が残り、本来の集落の中心が台地の西寄りにあったことを窺わせるが、近世の町場は地割の崩れから判断して、水害を避けた東寄りに形成されたとみられる。町場は街道に沿った街路村で、やはり短冊形の屋敷割を持つものの地尻は不統一であり、背後に林や農地が広がる⁵⁹⁾。町の構成は名主屋敷及び遍照寺を中心としたプランで上、中、下に分かれるが、この場合もやはり日光方面を上としている。

谷貝町は、農村としての高掛役は免除され、伝馬役、御堀掃除人足役、蔵米出人足役などの諸役を負担している⁶⁰⁾。

(2) 町の機能及び形態的性格

関宿城下町は独自の機能を有する個別の町が集まり、全体として多様な機能を有する複合体を形成している。各町の機能的要素には、城と結びつく城下町本来の商業的要素、河川交通を担う河岸場の要素、陸上交通を担う宿場の要素、農業活動を行い年貢を負担する農村的要素などが存在し、それらの要素の組み合わせにより町の性格が特徴づけられる。さらに各町の立地に注目すると、城に近接する町、成立当初の位置を維持する町、河川を指向する町、街道を指向する町などがみられ、それぞれが城を中心に点在している。こうした城下町の分散形態は各町の持つ主要な機能によって規定されているといえる。

形態的にみた場合、城下町としての性格をもつ要素が少ないことが特徴である。例えば、都市類型として城下町を捉える場合に指摘されるような枡形や遠見遮断などの防御的施設が全体として顕著ではない。さらに、各町の内部に成立時期の異なる町内町が存在し、町域に農地が広がる点は城下町としては異質である。また屋敷割においても地尻線が不統一で、間口に対し賦課される本来の役負担の在り方が形骸化しているといえる。さらに城から離れた宿場町の町名にみられる

「上」の意識は、城ではなく日光に向けられているなど、城下町としての城の求心性が低く、これらは住民の意識の上にも影響を与えたものと思われる。このように関宿城下には形態的に城下町であると判断することが極めて困難な点が存在する。

ところで、関宿城下の各町には碁盤型の町割が存在せず、いずれも主要街路に面した街路村を構成する。松本豊寿は碁盤型の町割を「団塊状町屋」、街路村を「街村状町屋」と呼んだが⁶¹⁾、ここでは前者を街区型町割、後者を街路型町割として考えたい。そして、それらの町割が卓越する城下町をそれぞれ街区型城下町、街路型城下町と呼ぶことにする。関宿城下町は後者に属するが、城下全体にわたる連続的な町割ではないことから、これを分散街路型城下町と呼ぶことにしたい。

この分散街路型城下町は、街道を媒介とした交通機能によって特徴づけられるが、各町が城や微高地、河川、街道を指向して分散しているという意味で、一般的な城下町と比べ特殊な形態であるといえる。とりわけ小規模な城下町に複数の宿場が内包される例は極めて珍しい事例である。こうした分散形態は城への求心性を弱め、その結果、各町がそれぞれ独自の機能に見合った町の形態を維持したと考えられる。そのことはまた、都市と農村の機能を併存させながら、分散的で全体としての都市のまとまりを持たない城下町が形成された要因でもあるといえる。

V. 関宿城下町の地域構造

(1) 譜代藩としての性格と領国経済

関宿城下町の性格を大きく位置づける条件として、2つの点を指摘することができる。1つは譜代藩城下町としての性格である。天正18年(1590)徳川家康は関東へ領地替えとなったが、その際に家康は関東の諸城に重臣を配した。関宿城もそうした徳川関東領国の一支城としての性格を持つが、それ故にいわ

ゆる一国一城令といったものの影響を受けず、領国経営のための新たな立地変化も行われなかった。そうしたことから関宿城は幕府の城としての性格が強く、幕府蔵米の収容や川関所の設置、北方の押さえとしての役割などを担う城となった。

また城及び城下は幕府からの預かりものとしての意識が働き、城下町の大きな改変には消極的であったものと思われる。さらに関宿城に入部する譜代大名は、城下の形成される近世の前半まで頻繁な転封を繰り返し、または幕府の要職に専心し、城下町経営に関しては独自の政策が実行できないという側面があったのである。さらに関宿に入部する大名はいずれも中小藩で、経済的に恵まれているとはいえず、既存の町場を城下に編入しなければならなかった。

2つめは関宿藩における領国経済の在り方についてである。図6に示すように関宿藩の領地は分散知行形態で、大名の石高に比して城付領が狭く実質的な領国の規模が小さいといえる。さらに経済的には江戸の経済圏に包含され、物資の動きも城下を通過するものが大半で、領国の中心たる城下町に集中する構造が形成されにくい。また、領国を取り巻く経済的な中心地(町場)の多さも領国経済における城下町商業の発展を押さえる要因に繋がっている(図6)。

以上のような2つの条件が関宿城下町のプランに大きく影響を与えていると考えられる。領国の中心としての求心性が低く、城下町の発達が進まないために職業別居住区が成立せず、また都市と農村の機能が未分離な状態であった。そして城下町全体に及ぶような明確な都市計画は存在せず、各町が分散したまま存在し、全体として交通機能に卓越した各町の機能が、領国の中心である城下町の機能を上回っているようにみえる。そのため立地環境の制約とも相俟って、分散街路型城下町の形態を生んだものと思われる。



図6 関宿藩の関東所領分布図（寛文期）

注：藩領は西岡・服部監修（1977）『日本歴史地図』全教図による。城跡の記号は主要な城下町、点線内ドットは城付領周辺の主要町場を示す。

（2）分散形態の機能的統合

関宿城下の各町は、城の周辺に分散しつつ独自の機能的性格を有しているものの、制度的には城下町として編成されている。それぞれ異なる条件で存在する町が、1つの城下町として統合される原理をここで考えたい。

関宿城下の各町に共通してみられる城下町としての唯一の要素は、城下町の町役を负担する点にある。それは地子免除や農村にかかる高役の免除などの特権の保持を意味する。城下町の本質は、このように藩と町との政治的相互依存関係にあるのではないかと考えられる。つまり制度的に規定された相互依存関係により関宿城下の各町は、城下町として編成されているのである。こうして考えるならば、関宿城下町は空間的に連続した都市域ではなく、政治的相互依存関係を媒介とした町人町を束ねる機能地域として捉えることがで

きる。また、そうした原則的な政治的相互依存関係は日常的には表面化し得ないが、町奉行の支配をうける行政地域として城下町の編成が固定化されているのである。

このように関宿城下町は、政治的相互依存関係によって機能的統合が図られていたと見なすことができるが、形態的には全く統一性を欠くのであろうか。個々の町における景観からは、特に1つの城下町としての共通した性格を見出すことは難しい。ところが各町は街道によって結びついているという共通性を持つ。恐らく江戸町のヨコ町化にみられるように、近世初期における街道整備の一環として城下各町に街道が導入された結果、関宿城下の各町が街道で結びつけられ、1つの城下町としての機能的統合を支えたと思われる。

以上のように関宿城下町は、政治的相互依存関係によって政治中枢である城郭と機能的に結びつき、街道を介して各町が線的に結びつくことで、城下町の機能的統合を強化したものと考えられる（図7）。各町は編成された時期も、またその理由もそれぞれに異なっていたと思われるが、そうした多様な町を領主支配の中で統合する原理こそが城下町の本質ではないかと思われる。

近世城下町の完成を空間的に捉える時、城下に一元化された連続する都市域がイメージ

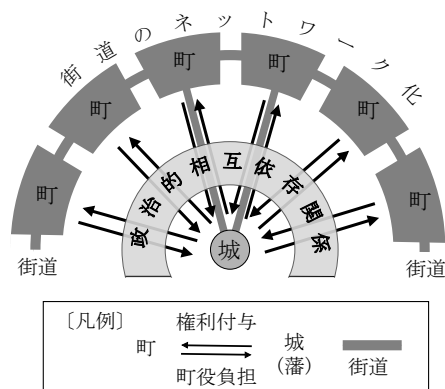


図7 関宿城下町の統合原理

されるが、関宿城下町の場合、城下町本来の商業的機能を担う町や交通機能に特化した町などが独自の機能を維持しつつ分散して存在していた。それらは近世城下町が必ずしも空間的な一元化を必要としないことを示すのではないであろうか。二元的に捉えられる戦国期の城下が一元化される段階は、近世城下町の成立を考える上で非常に重要な画期であったことには間違いない。多くの城下町がその段階を後世まで維持し続けていることにより、近世城下町の一元的な性格を強く印象づけているといえる。

しかしながら関宿城下町の事例から、幕藩体制下における城下町の在り方は、一元的な段階を越えて、空間性を超越した機能的連関を重視する段階に入ったのではないかと考えられる。政治的相互依存関係を基軸に据えながらも、空間的には柔軟であるその姿こそが、幕藩体制下における近世城下町の本質ではないかと思われるのである。それは関宿という分散的な城下町であるからこそ見出すことのできる仕組みだといえる。

VI. おわりに

関宿城下町は関東平野のほぼ中央部に位置し、旧利根川水系と常陸川水系とが交錯する水上交通の結節点として、戦国期以来経済的かつ軍事的な拠点として重要視されてきた。戦国期の関宿城下は、城を取り巻く囲郭を中心に内部と外部にそれぞれ宿を持つ構造を持っていたと考えられる。城郭内に成立した台宿と河川を指向した網代宿は、その立地形態の違いからそれぞれ異なる機能を持っていたと推測される。

天正18年、家康の関東入部に前後して、戦国期以来の両宿は新たに再編され、近世城下町としての形を整えていった。台宿は網代宿の住人を迎えて郭外に台町を形成した。そして少し遅れて網代宿の一部が城に近接して新町を造り、後の江戸町となった。その他にも

網代宿を引き継ぐ元町、渡津集落として成立したと思われる境町、宿場町として成立した谷貝町といった空間的に城から隔たった3町が城下に編入され、「御城下五町」と呼ばれる近世関宿城下町を構成した。これは新たに城下町を造らず、既存の交通機能を取り込んだものである。

次に正保図をもとに近世初期の関宿の城下町プランを検討した。関宿城下町は城郭内を武家地が占有する郭内専士型プランを採用していた。城に引き寄せられた2町は、先行する台町がタテ町型を、後にできた江戸町がヨコ町型を採用し、2つの異なるプランが併存する形態を示していた。またその他の町では、戦国以来の町場の一部が移動せずに残り、その分布も分散的で統一した都市計画はみられなかった。逆に中世的な要素を色濃く残していたが、城下の要所に寺院や足軽屋敷を配置するなど、防衛的な配慮がなされていた。

正保期以降の城下町の変遷には大きく2つの特徴があった。1つは、郭外の足軽町が城郭に引き寄せられることで実質的に郭内が拡大し、士卒と町人・百姓の居住区が明確に区別され、郭内専士型の傾向が一層強まった。2つめには新たな町人地の成立と台町のヨコ町化により城下町の分散傾向が一層強まった点である。武家地が中心へ集まり、城下町全体の防御性が解消された反面、交通機能の発達を受けて町人地の広がりはいよいよ開放的になった。

城下各町の機能的要素には、領主需要に応じた商業的機能、河港機能、宿場機能、農村機能などが存在し、そうした機能は各町の立地環境と密接に関係した。そのため各町の形態はその町の主要な機能を反映したものとなり、形態的にみても城下町の特徴を備えているとはいえなかった。さらに各町の分散傾向は城への求心性を弱め、都市と農村の機能が併存した空間的に曖昧な城下町を生み出した

といえる。

このような関宿城下町の性格は、譜代藩城下町としての側面と領国経済の在り方とによって規定されていたと見なすことができる。度重なる転封や幕府の城としての性格、藩の経済力の弱さが一貫した独自の城下町経営を困難にし、既存の町に依拠せざるを得ない状況を生んだものと理解される。また、藩領が分散的で城付領が小さい上に、江戸や周辺町場の影響下にあつて独自の藩領経済圏が発達しにくいといった状況が都市としての発展を抑制していたといえる。

このように分散的な形態を示す関宿城下町は、いわば政治的相互依存関係によって結びついた機能地域として理解することができる。城下の各町は、政治的相互依存関係によって政治中枢である城郭と機能的に結びつき、城下町としての統合を果たしていたと考えられる。

こうした城下町の在り方は一見非常に特殊であるといえるが、それを許容できる背景が幕藩体制下の社会には存在したと思われる。つまり社会の平和と安定化、領国支配の貫徹、領主需要に対する依存度の減少、経済の活性化と交通・流通網の発展などの諸条件が、城と町との空間的分離を可能にしたといえる。

近世城下町は、一般的に織豊期における城と町との一元的統合を強く志向した城下町の成立を経て、つぎには空間性を超越した機能的連関を重視する段階に入ったのではないかと考えられる⁸²⁾。こうした在り方こそ幕藩体制下における城下町の本質ではなかっただろうか。今後はこうした見方がどこまで適用できるか、他の城下町についても検討していきたい。

(國學院大學・非常勤講師)

〔付記〕

本稿作成にあたっては、大変多くの方にお世話になりました。とりわけ、史料調査の便宜を

図っていただいた境町歴史民俗資料館の青木敏雄氏、ご助言を頂いた伊藤寿和先生、遠山成一先生、査読者の先生方に、付して厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、卒業後も変わらぬ御指導を頂いております、國學院大學文学部の林和生先生と吉田敏弘先生に心より御礼申し上げます。

〔注〕

- 1) 本来城下町とは城下の町人町を示す用語であるが、本稿では城郭、武家地、町人地、寺社地などから構成される都市全体の意味で城下町の用語を使用する。
- 2) 松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究 増訂版』、吉川弘文館、1967、197～222頁。
- 3) 矢守一彦『都市プランの研究』、大明堂、1970、249頁。なお矢守は、「プラン」の用語を単に計画理念のみを指す用語ではなく、それを含む実態概念として使用しているが、本稿もこの立場に従う。
- 4) 小島道裕「戦国期城下町の構造」、日本史研究257、1984、30～59頁。
- 5) 市村高男『戦国期東国の都市と権力』、思文閣、1994、418～420頁。
- 6) 足利健亮『中近世都市の歴史地理一町・筋・辻子をめぐって一』、地人書房、1984、93～139頁。
- 7) 前川 要『都市考古学の研究—中世から近世への展開—』、柏書房、1991、79～119頁。
- 8) 宮本雅明『都市空間の近世史研究』、中央公論美術出版、2005、33～51頁。
- 9) 原田伴彦『中世における都市の研究』、三一書房、1972（初版1942）、97～100頁。
- 10) 前掲2）232～257頁。
- 11) 前掲3）247～285頁。
- 12) 川名 禎「城下町としての境—消えゆく関宿の城と町—」（境町史編さん委員会編『下総境の生活史 図説境の歴史』、境町、2005）、104～105頁。
- 13) 清宮秀堅『下総國舊事考』、崙書房、1976（初版1905）、619頁。
- 14) 寛政元年（1789）「懷中諸用之覚書」、関宿会田家文書。

- 15) 川村博忠『国絵図』, 吉川弘文館, 1990, 76頁。
- 16) 元禄11年(1697)「下総国川妻村書上」(境町史編さん委員会編『下総境の生活史 史料編近世Ⅰ 河岸町的生活』, 境町, 2000), 552~553頁。
- 17) 川名 禎「笠間稲荷神社所蔵の関宿城絵図について」, 利根川文化研究30, 2007, 45~50頁。
- 18) 「五街道其外分間見取延絵図」のうち, 文化3年「関宿通多功道見取絵図」(東京国立博物館所蔵)。
- 19) 峰岸純夫「中世東国の水運について」, 国史学141, 1990, 1~17頁。
- 20) 永禄元年(1558)「北条氏康書状」(境町史編さん委員会編『下総境の生活史 史料編原始・古代・中世』, 境町, 2004), 310頁。
- 21) 吉田東伍『日本歴史地理之研究』, 富山房, 1975(初版1923), 162~163頁。
- 22) 小笠原長和「東国史の舞台としての利根川・常陸川水脈」(東国戦国史研究会編『関東中心戦国史論集』, 名著出版, 1980), 118~129頁。
- 23) 寛政3年(1791)「横田所左衛門家財録」(千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史 資料編近世6(下総2)』, 千葉県, 2005), 410頁。
- 24) 天正2年(1574)「北条綱成書状」, 前掲20) 324~325頁。
- 25) また天正13年の「北条氏政朱印状写」にみられる「関宿酒井曲輪」も, この時築造された3ヶ所の内の1つだった可能性が考えられる。その場合この流れは常陸川を指し, 曲輪は対岸の境町寄りに造られたと想定される。前掲20) 332頁。
- 26) ①市村高男「関宿と栗橋の城と町」(鷺宮町役場編『鷺宮町史 通史編 上巻』, 鷺宮町役場, 1986), 733~744頁。②長塚 孝「後北条氏と下総関宿-支城形成の一過程」(千葉歴史学会編『中世房総の権力と社会』, 高科書店, 1991), 111~144頁。③阿部浩一「中世後期における関東内陸の水上交通と伝馬・宿-下総関宿を中心として-」(峰岸純夫・村井章介編『中世東国の物流と都市』, 山川出版社, 1995), 85~111頁。④新井浩文「中世関宿城下の宿とその機能-網代宿を中心として-」, 『千葉県立関宿城博物館研究報告』, 1, 1997, 3~9頁。⑤遠山成一「中世関宿城の城下構造に関する一考察」, 千葉史学48, 2006, 56~68頁。⑥伊藤寿和「下総国関宿城下町に関する歴史地理学的研究」, 日本女子大学紀要文学部56, 2007, 1~23頁。
- 27) 永禄8年(1565)「足利義氏感状写」及び「築田晴助書状写」, 前掲20) 314頁。
- 28) 喜多村常次郎『西関宿誌』, 私家版, 1969, 30頁。
- 29) 慶長8年「松平康元定書写」(鷺宮町役場編『鷺宮町史 史料3 中世』, 鷺宮町役場, 1982), 587頁。
- 30) 慶長14年「松平忠良掟書写」, 前掲29) 590~591頁。なお当時は天領においても農民の直訴や逃散が多くみられたが, 関宿藩主であった松平忠良も「傍若無人隣国ノ大名モモテアグミ, 百姓町人難儀ニ及フコト, 勝テ云難シ」と伝えられることから, この掟は単なる町人誘致政策ではなく, 百姓町人の領内への帰住を目的としたものであったと理解される。今泉政隣『世喜宿伝記』(房総叢書刊行会編『房総叢書 第4巻』, 房総叢書刊行会, 1941), 257頁。
- 31) 安政5年(1858)「巡見使尋問につき台町明細書上」, 前掲23) 425頁。
- 32) 前掲23) 394頁。
- 33) 天正17年「北条氏政印判状写」, 前掲29) 530頁。
- 34) 厳密にはウチから網代宿(ソト)を経由して, 現在の台町(ソト)に分かれたものと考えられる。
- 35) 天明5年(1785)「江戸川通付越荷物一件吟味控」, 前掲16) 710頁。
- 36) 慶安元年(1648)「仁連村新規馬継ぎ出入一件」(三和町史編さん委員会編『三和町史 資料編近世』, 三和町, 1992), 772頁。
- 37) 小野崎克巳「日光東往還の成立と助郷の変遷-下総猿島郡諸川町・仁連町・谷貝町を中心として-」, 地方史研究52-2, 2002, 25~43頁。
- 38) 寛文3年(1663)「日光社参伝馬継立方につ

- き届書」, 前掲16) 794~795頁。
- 39) 正徳5年(1715)「日光道中助郷免除願一件書」, 前掲16) 798頁。
 - 40) 矢守一彦『都市図の歴史 日本編』, 講談社, 1974, 233~235頁ほか。
 - 41) 前掲14)。
 - 42) 太日川のルートは現在の庄内古川に比定できるが, ここでは江戸川西方の郡界線に対応するラインを太日川の一部と想定している。この旧河道は直線的で自然堤防の発達が顕著ではなく, 自然河川としては疑問が持たれるが, 逆川及び権現堂川から南に分流する人為的開削を伴う太日川の一支流であると考えられる。
 - 43) 前掲14)。
 - 44) 元文3年(1738)「下総國利根川通両側絵図」, 境町長野家文書。
 - 45) 前掲14)。東西高野村には, 冥加金を上納する質屋の存在が確認でき, 集落内における商業機能の存在が窺われる。万延元年(1860)「質屋冥加金上納につき願書」, 前掲16) 376頁。
 - 46) 関宿河岸の形態的变化については加藤による一連の研究が存在する。また向河岸の豪商喜多村家に関しては岩淵の研究がある。
①加藤光子「地籍図にみる関宿河岸の復原」, 『千葉県立関宿城博物館研究報告』, 1, 1997, 1~8頁。②岩淵令治「不在地主と町・村」, 年報都市史研究5, 1997, 3~15頁。
 - 47) 南海友儀撰『関宿土産』, 1836。
 - 48) 川名 登『河岸に生きる人々』, 平凡社, 1982, 178頁。
 - 49) 前掲23) 129~130頁。
 - 50) 国立史料館編『寛文朱印留 上』, 東京大学出版会, 1980, 182頁。
 - 51) 吉田伸之「関宿城下の町方騒動」, 前掲23) 41~42頁。
 - 52) 千葉地方法務局『土地台帳付属地図 台町』, 千葉地方法務局, 1876。
 - 53) 千葉地方法務局『土地台帳付属地図 元町』, 千葉地方法務局, 1876。
 - 54) 千葉地方法務局『土地台帳付属地図 内町』, 千葉地方法務局, 1876。
 - 55) 川名 登『近世日本水運史の研究』, 雄山閣, 1984, 85頁。
 - 56) 天保4年(1833)「飯盛下女差置許可につき願書」, 前掲16) 402~403頁。
 - 57) 享保5年(1720)「境町絵図」, 境町小松原家文書。
 - 58) 直線古道の痕跡は, 東山田付近で明瞭である。また南方向に延長した境町西泉田・伏木地区からは盛土状遺構と硬化面が検出されており, 古道の痕跡にあたるものではないかと思われる。霞文化財研究所編『茨城県猿島郡境町西泉田・伏木遺跡』, 境町教育委員会, 2001, 11頁。
 - 59) 天保3年(1832)「谷貝村絵図」, 古河市初見家文書。
 - 60) 宝永3年(1706)「谷貝町指出し覚帳」, 前掲36) 631頁。
 - 61) 前掲2) 313頁。
 - 62) 関宿では, 城に近接した江戸町及び台町のプランに一元的な性格が看取される。一方城下町の分散傾向及びその機能地域化は, 関宿のような小城下町においてより顕著であると思われる。ただし規模の大きな城下町の場合でも, 例えば外港のように実質的に城下町の交通機能を担う町が離れて存在する例もあり, 城下町の機能地域としての性格は規模に関わりがないものとして理解することができる。

Formation and Unification of a Dispersing Castle Town: Through the Reconstruction of Sekiyado Castle Town in Shimousa Province

KAWANA Tadashi

This paper aims to clarify the formation and process of Sekiyado castle town in early modern times through the reconstruction of Sekiyado castle town. Sekiyado castle town is located in the center of the Kanto plain, and it was regarded as a strategically important point for water traffic. Sekiyado castle had two towns called “Daishuku” and “Aziroshuku” in the latter half of the 16th century. “Daishuku” was next to the castle, and “Aziroshuku” was near the river far from the castle. It is thought that each location of the two towns shows the difference in the city function. Afterwards the two towns were re-organized as the merchant district (*chonin-machi*) of the new castle town.

In the first half of the 17th century, in Sekiyado castle town, the Samurai district was arranged in the castle area, and the *chonin-machi* was arranged outside the castle area. The common soldier districts and temples were also arranged on the perimeter of the castle town.

Each *chonin-machi* adjacent to the castle adopted a plan of *tate-machi* and the *yoko-machi* model. Such differences in each form show the differences in the time the machi were established. And these five machi were organized as Sekiyado castle town. As a result, Sekiyado castle town became a dispersed form.

In the latter half of the 17th century, the common soldier district at the edge of the castle town moved into the castle area. Therefore, the castle area spread substantially. Moreover, new *chonin-machi* were formed along the main road and ruins of temples.

Each machi of Sekiyado castle town was characterized as a commercial function, a harbor function, a stage function, and an agriculture function. Centripetal force to the castle was low in remote machi from the castle, which was in the stage of non-separation between urban and farm functions.

Sekiyado castle town was unable to develop as a highly advanced center, and it formed a dispersing spacial form. It became a dispersing functional region tied up with politically interdependent relations. In conclusion, it is thought that the city in early modern times under the Shogunate reign had a great importance for such functional ties.

Key words: Sekiyado castle town, plan, a dispersing form, functional region,
politically interdependent relations